

大阪ろうさい クロニクル

第3号

発行日
2023.2.1

ごあいさつ

院長 田内 潤



春寒の候、皆様におかれましては、ますますご清福にお過ごしのこととお喜び申し上げます。

さて、当院は昨年1月に新病院を開院し、おかげさまで無事1周年を迎えることができました。これもひとえに、地域の皆様、開院に際しご尽力くださいました関係者の皆様に支えていただいたおかげと心より感謝いたします。

2022年は新病院への移転に始まり、新型コロナウイルス感染症の第6波、7波と感染拡大を繰り返し、現在第8波がようやく終息しつつあります。当院は、昨年4月より重点医療機関として新型コロナウイルス感染患者の受入病床数を増床し対応を行ってきました。今年も引き続き、新型コロナウイルス感染症に対応しながら、当院が地域で求められる救急外来および通常診療にも力を入れ地域医療を支えるべく日々努力して行く所存です。

これまで当院は、働く人びとの健康を支援する勤労者医療を使命の一つとしつつ、地域の急性期医療を中心的に担って発展してきました。また、国の「地域がん診療連携拠点病院(高度型)」、大阪府の「地域医療支援病院」や、「日本医療機能評価機構認定病院」をはじめとした多くの認定病院、指定病院として、「誠実で質の高い医療を行う」という基本理念の下に、「急性期医療の充実」、「高度専門医療の実践」、「地域医療連携ネットワークの構築」、「勤労者医療の展開」、「安全な医療の推進」、「働きがいのある職場づくり」などの基本方針をかげて、病院が一体となってより良き医療を提供できるよう努力を引き続き重ねてまいります。

最後に、今後も、南大阪の中核病院として、地域の皆様により信頼される病院を目指していきたく思いますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

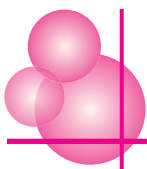


基本理念

誠実で質の高い医療を行い、
すべての方々から選ばれる病院に

基本方針

1. 地域と連携し地域に信頼される急性期医療を行います
2. 高度で安全な医療に全力をあげてとりくみます
3. 患者さまの立場と権利を尊重する医療に努めます
4. 勤労者医療を担ってこれを推進します
5. 働きがいのある職場づくりを推進します



診療科紹介 外科・消化器外科

外科・消化器外科部長 赤丸 祐介



外科・消化器外科では、食道、胃、小腸、結腸、直腸、肝臓、膵臓、胆道など消化器臓器の悪性腫瘍(がん)、胆嚢結石症、腸閉塞、ヘルニアや虫垂炎など一般的な消化器疾患に対する外科手術を中心に診療を行っています。上部消化管外科、下部消化管外科、肝胆膵外科の3つの専門分野があり、スタッフ11名、専攻医(後期臨床研修医)2名の体制で、基本的には疾患グループ別に診療していますが、横断的疾患や緊急時にはしっかり協力し、消化器外科全体として高度で安全な手術を提供しています。

消化器がんに対して、最近はさまざまな新規治療法が開発されてきてはいますが、根治を得るためにはやはり外科手術が最善の治療法である状況に変わりはありません。当科では消化器がん治療の最後の砦として、がんの根治を目指して日々厳しい手術に臨んでいます。また根治性を維持しながら傷が小さく患者さまに負担の少ない低侵襲手術の適応拡大を積極的に進めており、腹腔鏡手術、ロボット支援下手術の割合は年次ごとに着実に増加しています。

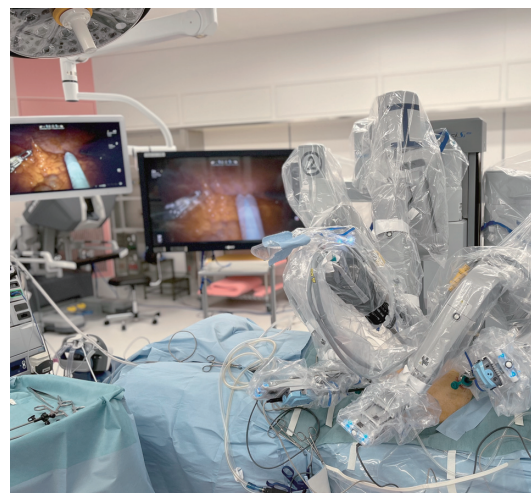
新病院となり手術室は3室増室、1室ごとのスペースも拡大し、ロボット専用手術室も整備されました。消化器外科手術枠も増え、紹介・受診から手術までの待機期間をできるだけ短くするように努めています。また急性腹症に対しては24時間体制で緊急手術に対応できる体制を整えており、年間約150例の緊急手術を実施しています。

悪性疾患のみならず良性疾患や緊急手術にもしっかりと対応し、堺市2次医療圏の基幹病院として今後も質の高い安全な外科手術を提供していきたいと考えています。今後とも何とぞよろしくお願い申し上げます。

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
全消化器外科手術数	1,044	1,056	1,067	1,021	1,025
うち全身麻酔手術数	853	865	916	931	882

2021年 術式別の手術症例数

	総数	うち低侵襲手術数
食道がん切除	11	10
胃がん切除	81	40
結腸がん切除	119	117
直腸がん切除・切断	70	68
肝臓がん切除	35	12
膵頭十二指腸切除	11	0
尾側膵切除	12	4
胆石症・胆嚢炎手術	219	218
腸閉塞手術	19	8
虫垂炎手術	55	55
ヘルニア手術	145	78



ダビンチ手術風景

「チーム医療に基づいた 高度な乳腺診療を目指して」

がんゲノムセンター長/乳腺外科部長 橋 高 信 義



新春の候、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

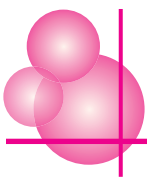
この度、前任の森島宏隆部長の後を継いで、大阪ろうさい病院乳腺外科部長、兼がんゲノムセンター長に就任いたしました。前の職場である大阪国際がんセンターでは約8年間にわたり最先端の乳腺診療および臨床試験に携わってまいりましたが、今後はがんセンターで培ってきた経験、知識、技術をこの大阪ろうさい病院でも存分に発揮していきたいと考えております。

現在、当科では私を含め乳腺専門医2名を中心に乳腺診療を行なっておりますが、乳がん看護認定看護師や高度な医療補助スキルを持ったメディカルクラークのサポートもあり、非常にスムーズな診療が行えております。乳癌治療といえば手術療法、薬物療法、放射線療法に注目が集まりがちですが、同時に診断時から終末期に至るまでの患者さまやそのご家族も含めた身体的・精神的なケアというものも重要なポイントであり、当科では乳がん看護認定看護師や緩和医療チームとの積極的な連携を行うことで、より安心して癌の治療を受けられるような体制を目指しております。

また、昨今話題となっているがんゲノム医療に関しても、大阪ろうさい病院は「がんゲノム医療連携病院」に認定されており、がんゲノム中核拠点病院である大阪大学医学部附属病院との連携の下、「がん遺伝子パネル検査」の施行や「エキスパートパネルの結果」についてもご説明させていただくことが可能となっております。患者さまにとって「がんゲノム医療」がより身近なものに感じていただけるようにゲノム診療体制の向上を図っていきたくと考えております。

最後に、ますます高齢化が進む現代社会において、患者さまの社会的・心理的な観点および生活への十分な配慮も必要となり、医師や看護師等のキャパシティを超えた医療が要求されてくることは必然かと思われれます。専門職種の積極的な活用ならびに多職種連携を推進することにより医療の質を高めるとともに、効率的な医療サービスを提供する高度なチーム医療の構築を目指していきたくと思います。今後ともご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。





診療科紹介 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

副院長/耳鼻咽喉科・頭頸部外科部長 西池季隆



耳鼻咽喉科は1962年の大阪ろうさい病院開院と同時に設置され、以来60年以上の長きにわたって地域の中核として診療・手術を行ってきました。2012年には頭頸部外科が併設され、科の呼称は耳鼻咽喉科・頭頸部外科となりました。当科は耳鼻咽喉科・頭頸部外科全分野にわたる診療・手術を行っています。新病院に移転し、4K内視鏡モニター、CO₂レーザーおよびコプレーター等の最新の手術機器を取りそろえています。手術は全身麻酔で平日の毎日おこなっており、大阪府でも屈指の症例数を有しています。

当科は、耳疾患に対して低侵襲な経外耳道的内視鏡下耳科手術を積極的に行ってきましたが、2022年からこれが診療報酬点数として加算できるようになりました(図1)。私たちは鼓室形成術やアブミ骨手術では大半をこの手術法で行っており、全国屈指の手術件数を誇ります。副鼻腔炎に対する内視鏡下鼻副鼻腔手術では、全例ナビゲーションシステムを導入しており、安全で精密な手術が可能となっています(図2)。鼻内悪性腫瘍に対しても、頭頸部チームと連携して低侵襲な経鼻内視鏡下手術をおこなっています。

頭頸部チームは、頭頸部がんに対する手術適応に関しては、患者さまごとに適応を厳密に決定し、安全かつ低侵襲な手術治療を提供しています(図3)。咽頭・喉頭の表在癌に対しては、経口的下咽頭喉頭部分切除術を実施しています。QOLに関わる神経機能温存のために、神経モニタリングシステムを導入しています。化学療法として、殺細胞性抗がん剤、分子標的薬あるいは免疫チェックポイント阻害薬を症例ごとに使い分けた治療を提供しています。

現在、私たちスタッフが充実した診療活動を行っているのも、地域の先生方の患者さまのご紹介をはじめとしたサポートのお蔭であると深く感謝申し上げます。今後も当科に対してさらなるご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



図1. 耳科手術



図2. 鼻科手術



図3. 頭頸部外科手術

診療科紹介 糖尿病内科

糖尿病内科部長 良本 佳代子



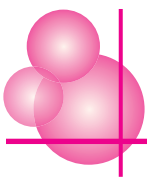
糖尿病内科は、初発の糖尿病患者さまの教育をはじめ、血糖コントロール悪化の原因検索や適正な血糖コントロール、合併症の精査・加療などを行っています。教育入院は2週間コースで、看護師・薬剤師・管理栄養士・運動療法士・臨床検査技師20数名からなる糖尿病療養指導チームのサポートにより糖尿病治療上必要な知識を習得いただけます。同時にインスリン治療を開始、可能であれば内服薬へ変更、必要時はインスリン自己注射および自己血糖測定の手技確立を行います。朝昼夕と提供される食事は量や味覚をリセットできる好機で適切な食習慣の第1歩となります。入院不能な場合、看護師と管理栄養士による外来療養指導チームが教育入院に準じる指導を行い、インスリン治療も含めた療養を可能にしてきました。

ここ20年新たに登場した糖尿病治療薬として、多種のインスリン、副作用の少ないDPP4阻害薬、肥満糖尿病にも有用なGLP1受容体作動薬、慢性腎臓病や心不全の効能も有するSGLT2阻害薬などがあります。糖尿病の病態を考慮し、高齢・肥満・合併症にも配慮の上、低血糖を起こさない血糖コントロールが可能です。自己血糖測定器の性能も向上、解析ソフトで治療効果判定も簡便です。持続型血糖モニターも保険適応が拡大され、インスリン使用者は装着可能です。自動的にBluetoothからスマホにデータ送信され、家族のスマホやapple watchへ低血糖を知らせる機種もあります。持続型血糖モニターとクローズドループで連動するインスリンポンプは、血糖値に応じたインスリン注入により目標血糖の維持を可能にしました。

高血圧の原因疾患である原発性アルドステロン症や、免疫チェックポイント阻害薬の副作用による内分泌障害が増加しており、糖尿病以外の内分泌疾患のニーズも高まっております。負荷検査入院も含めた精査加療も行っています。

医師数は少ないながらも多職種協力のもと、チーム医療で最善の治療を患者さまへ提供できるよう今後も努力していきます。多数のご紹介をお待ちしています。





「大阪ろうさい病院における看護のご紹介」



看護部長 森 石 好 江

当院の看護部をご紹介します。

看護部の理想とする看護職員像は以下のとおりです。

- 1) 看護倫理に基づいて行動できる看護職員
- 2) 明るく・元気で・思いやり・感謝、そして助け合いの心をもった人間性豊かな看護職員
- 3) 環境の変化にたくましく柔軟に対応することができる看護職員
- 4) 専門職として科学的根拠に基づいた看護実践ができる看護師
行動の根拠を明確にしながら実践できる看護助手
- 5) 組織人として協働できる看護職員
- 6) チーム活動を活性化することができる看護職員
- 7) 自己学習や研究を通して考えることのできる看護職員

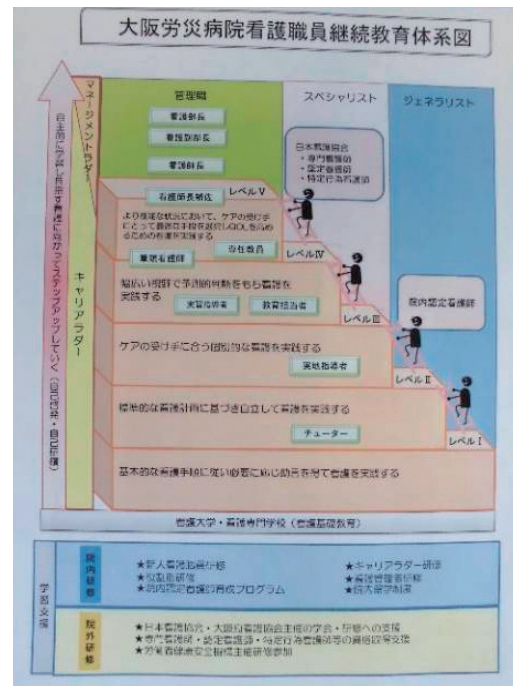
当院は創立60周年を迎えましたが、理想に近づけるよう教育には昔から力を注いでいます。

●教育体制

『労災病院看護部キャリアラダー』に基づいた教育体制を整備しています。これは日本看護協会のクリニカルラダーに労災病院で勤務する看護師の使命である「勤労者看護」を看護の核となる実践能力に追加し、組織的役割遂行能力と自己教育・研究能力を加えたものです。これに則り、ラダーIIIをクリアすれば院内認定看護師を目指すことができ、ラダーIVをクリアすれば専門・認定・特定看護師を目指すことができるとしており、個人のキャリアアップに連動させています。

院内認定制度は、ラダーIIIをクリアした人が興味のある領域で知識や技術を深めて更に活躍できるようにと約20年前から開始している制度です。現在では14分野(感染管理・糖尿病看護・スポーツ整形外科看護・慢性腎不全看護・眼科看護・ストーマケア看護(消化器系/泌尿器系)・手術看護・緩和ケア・退院支援看護・フットケア・勤労者看護・認知症/せん妄看護・新人教育担当者・実地指導者)158名が活動しています。

当院では労働者健康安全機構本部の助成を得て、専門看護師2名、認定看護師16分野25名(うち特定認定11名)、特定看護師4名が活躍しています。特定行為研修は機構本部が指定研修機関となっている為、研修を受けやすい環境にあり毎年増加しています。3月には専門・認定看護師の企画による地域の看護師対象セミナーを企画していますのでぜひご参加ください。



● 勤労者看護

「労災病院」の使命の1つに「勤労者医療」があります。働く人々が病気と共存しながら仕事を続けていける(=治療と仕事の両立)ように支援<https://www.ryoritsushien.johas.go.jp/>です。当院は急性期医療を実践していますので、検査や治療が終わればそれで完了という方も多のですが、心不全・がん・糖尿病などの疾患ではそうはいきません。このため、患者さまが退院後も治療しながら仕事が続けられるように、平均在院日数が10日弱という入院期間中にも意識して取り組んでいます。この「勤労者医療・勤労者看護」という概念や実践は学生時代には学んでいない又は不十分な領域ですので、卒後教育として治療就労両立支援センターのMSWや保健師などと協力して院内研修を実施すると共に「院内認定看護師」制度にも新たに『勤労者看護』の分野を設けて、より多くの患者さまに実践できるようにしています。病棟や外来で実際に行われた「勤労者看護」は毎年その成果として事例報告集にまとめており、学会でも発表しています。



● 産科病棟

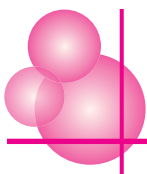
新病院の産科病棟には念願であったLDR(陣痛Labor、分娩Delivery、回復Recovery)が3室できました。ClopMipの助産師を中心にコロナ禍でもより良い分娩を！とコロナ陽性となった産婦さまもコロナ受け入れ病棟のスタッフと協力して頑張っています。ハード面も充実した当院をぜひご利用ください。



● 看護管理者のパートナーシップシステム(Nurse Manager Partnership System)

新病院になりスタッフだけでなく、看護管理者も相談し共に学び協力する看護管理者のパートナーシップシステム(NMPS)を導入しました。新病院の建物は中央に東西の病棟が共有で利用するカンファレンス室を配置しており、お互いの顔が見えて行き来しやすい構造になっているためその効果検証が楽しみです。

新病院に移転してからの看護部の最大の課題は時間外の増加です。情報収集⇒分析・考察⇒計画⇒実施⇒と、より良い看護を実践するために問題解決に取り組んでいます。



「メディカルサポートセンターの紹介」

メディカルサポートセンター室長 今本都子



早いもので新病院に移転してから、1年が過ぎました。新病院では、入院支援室と退院支援が一緒となり、より患者さまが安心して治療に専念した入院生活を送ることができるように、継続した関りをもつことができるようになりました。また、面談室の数も旧病院の3部屋から5部屋と増えたことで、よりプライバシーに配慮することができるようになりました。

<地域連携の促進>

本年度より、診療科部長と共に地域の先生方へのご挨拶を順次再開するとともに、登録医意見交換会も感染状況に応じて工夫し、地域の先生方との連携がより円滑にできるように、病院と地域との調整役として努力しています。

<患者相談窓口>

新病院となり窓口がメディカルサポートセンターの中に入ってしまったが、相談窓口にはメディエーター研修を受けた看護師やソーシャルワーカーが対応し患者・家族さまからの看護相談や医療相談をはじめ、様々なご相談の窓口を行っています。今後とも、皆様の相談事に真摯に向き合い対応していきたいと思っておりますので、お気軽にお声をお掛けください。

<入退院調整の質の向上>

患者さまの高齢化に伴い、治療終了後スムーズに退院することができるように、退院調整が必要となる患者さまが年々増加しています。病状を踏まえ患者・家族の気持ちに寄り添いながら、最もよい方法を共に考え、毎年95%以上の患者さまを住み慣れた自宅へ退院調整を行うことができました。退院調整が必要となった患者さまの平均在院日数も2021年度は18日とスムーズに退院することができるようになり、地域の先生方、訪問看護師さん、ケアマネージャー・ヘルパーさん等の地域の皆様のご協力のおかげであると感謝しております。今後更に、退院支援の院内教育を充実させ患者さまを中心とした、ケアシステムの一員であることや退院支援・退院調整の質の向上を目指していきたいと考えておりますので、変わらぬご支援をお願いいたします。



独立行政法人
労働者健康安全機構 **大阪ろうさい病院**
日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療連携拠点病院(高度型)
地域医療支援病院

〒591-8025
大阪府堺市北区長曾根町1179-3
TEL 072-252-3561(代表)
072-255-8076(メディカルサポートセンター)
FAX 072-255-8203(メディカルサポートセンター)
<http://www.osakah.johas.go.jp/>